

アトリエ 琉游舎 だより 213号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2025年9月10日発行

草露白 鵲鵲鳴 玄鳥去

(くさのつゆしろし) (せきれいなく) (つばめさる)

○9月8日から22日までが24節気の「白露」、処暑と秋分の間、草花の上に降りた朝露が白く涼しく見える頃、夏から秋への変わり目です。最初の5日が初候の「草露白」、草の露が白く輝いて見えます。中候が「鵲鵲鳴」、セキレイが鳴く頃です。セキレイは日本書紀の国産み神話に、男女の神が結ばれるきっかけを作った鳥として登場します。末候は「玄鳥去」、ツバメが子育てを終え南へ帰っていく頃。季節の変化を自然の中に観る美しい言葉と文字です。

○季節の変化を動植物や雨露などに仮託し、音韻と漢字の象形に表現してきたことは、視覚と聴覚の融合、漢字文化特有のものに感じられます。漢字文化圏以外では見られない「書」の表現様式も、漢字の象形が生み出す音韻が書によって際だって聞こえるからなのでしょう。

○「鵲鵲」の文字を「せきれい」と読み、「玄鳥」の文字を「つばめ」と読む機会は私には殆どありませんでした。恐らく単独で出されても読めなかったでしょう。それが音と形と意味が融合したとたん、草露白も鵲鵲鳴も玄鳥去も映像となって私の脳裏にイメージされます。

○イメージと実感が一つになると、益々季節感や自然が愛おしくなります。まだこの一体感は健在だと思いたいのですが、夏から秋への移行が曖昧な最近の気候の中で、セキレイが鳴きツバメが南に帰るタイミングを間違えないかと心配になります。冬眠しない熊、越冬する渡り鳥、昼間でも民家に姿を現す猪、まだまだイレギュラーな生き物の行動は増えているように思います。イメージと実態の乖離です。もしこれが永続的なものなら、私たちが当然と思っている季節や生き物のイメージを書き直す必要があるでしょう。これが、終わりの見えないこの夏に、このままの自然と人との関係の継続を願う私の杞憂であれば良いのですが。

秋の彼岸会法要 9月20日（土）10時半 琉游舎にて

9月・10月スケジュール

			木	金	土	日
			11	12	13	14
火	水					
15	16	17	18	19	20 彼岸会法要 10時半	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30 読書会 13時半から	10月1日	2	3	4	5 写経会 13時半から
6	7	8	9	10	11	12

読書会
9月30日（日）
13時半から

写経会
10月5日（日）
13時半から

今年もまた稲刈りの季節がやってきました。農事があらゆる生活カレンダーの基準になっていた時代の田舎で幼少時代を過した私には、あきらかに稲作の時期が一ヶ月は前倒しになっているように見えます。田植えは5月から6月にかけて、稲刈りも9月の終わり頃という記憶があるのですが、最近はゴールデンウィーク前には田植えが終了し、稲刈りも8月の終わり頃から始まります。かつては田んぼに水が入るのが3月、苗代が作られ、代掻きが行われます。当初は耕耘機でしたが次第にトラクターに変わり、手押しの田植機から乗用の田植機に変わり、夏の間は稲の間を箱車のようなものを押して草を取っていた姿が記憶に残っています。田んぼではその期間至る所で農家の人が働いている光景を見ることができました。まさしく手作りの米です。

現在、田んぼで見かける人の数はトラクターと田植機とコンバインを動かす時の、せいぜい一枚の田んぼで2、3人です。費やす時間も相当減っているはずですが。比べれば、機械化省力化で対労働時間あたりの収益率は飛躍的に増えているはずですが。しかし、未だに米作りと言う産業は産業として自立していない現状はなぜなのでしょう。自立していないとの見方には異論もあると思いますが、ひとつに米の輸入には大きな関税がかけられていること、つまり国際競争力がないこと。もうひとつに殆どの稲作農家が稲作だけでは生活が成り立たないこと、この2点だけでも米作りが産業として自立してないことは明確だと私は考えます。

それでは稲作は日本人にとって産業ではない他の何ものかかと言うことが問われなければなりません。細かい論証はしませんが、一言で言えば稲作は日本人の、文化、精神、社会構造、経済、権力統治の原点、なのです。単に経済合理性という一局面からでは判断できない、社会構造の基盤となるものです。米の収穫高（石高）は権力の源泉であり、経済力です。それを安定、維持、拡大するためにあらゆる社会制度が整えられていったことが、日本を形作ってきたと考えられます。よってその意識が希薄になったとは言え、未だに米は食の安全保障なのです。故に経済システムから外れても生産者と消費者からは米の安定供給と価格の適性維持が求められ、そのバランスが崩れたとき大きな政治社会問題となるのです。経済合理性は一切考えずに生産者はこれからも米を安定供給し続けられること、消費者が主食として適正価格で米を食べ続けられること、それ以外に国が農政として考えることはないはずなのですが、その時々、社会経済状況や声の大きいステイクホルダーの顔色を伺いながら、弥縫策を取り続けて来た結果が現在の米作りなのです。それは単なる米騒動として片付けられる経済事案ではなく、日本人の精神と社会構造、国土の安定を揺るがし荒廃させかねない事態だと、私は心から危惧しています。米作りがなくなることは日本がなくなることなのです。

元来、米作りには大変な労働力と自然の恵みが必要なのです。重労働の米には共同作業が必要です。米を作る最小単位は一家です。それらが他家と時には協働し、時には争い奪い合いながら土地と一家を維持しつつ米作りを行ってきたのです。一家が六親九族、一家一門となり、一村一郷、一国となる過程は、一家の生活が安定的に持続可能であることを願って、自然に形成されていった社会です。一所懸命は米の生産する場所を一家一族の全てをかけて守り続けることです。日本が形作られる基点が、米作りと一家にあると考えれば、先祖代々の土地を子孫へ繋ぐことと、家父長制家族制度への執着は日本人のDNAでもあるのです。

もう一つの要素である自然は、恵みを与えるかと思えば破壊も行います。水も太陽もなくてはならないものですが、それは稲を押し流してしまい田んぼを干上がらせてしまうことにもなります。土地の開墾、治水、用水の整備と、ほぼ人力のみで行われた米のための土地改良作業と生産は、日本人の生活時間の全てだったはずですが。日本人は米を作ることが生きることだったのです。しかし生活の全てを捧げても人智人力ではコントロールできないものが自然です。日本人はどうやっても力が及ばない自然がもたらす恵みに感謝し、また避けようのない自然の脅威に恐れおののき、畏怖し、祈りを捧げてきたのです。それを私たちはカミと呼びました。カミは天にも大地にも川にも山にも樹木にも作物にも石ころにさえも宿っているのです。八百万の神です。宇宙、自然、ありのままの世界、大いなるもののはからいのです。私たちは今、米が日本人の骨格であり、精神であり、日本の社会の心身を形作る基礎であることをもう一度思い起こす必要があります。

稲作が日本人の原点であることを忘れ去るよう強制されたきっかけが二度あります。ひとつは明治維新の神仏分離令と天皇（天照大神）を頂点とする神の序列化です。これにより一家、一族、一郷村を守っていたカミは抹消されてしまいました。その土地の風土と社会が自ずから必要とした氏神や地主神はすべて天照大神の家来となり、各々が自然（カミ）と対話しながら行ってきた稲作は、天皇（天照大神）の権力と権威に吸収されてしまったのです。私たちのカミは貶められ、カミを宗教信仰の面から支えていた「仏」はうち捨てられ、日本人が独自に育ててきた神仏習合の信仰を放棄させられたのです。そしてもう一つのきっかけはGHQの土地政策です。農地解放は農業資本階級の地主から耕作者に土地を開放したという意味で、画期的な民主化政策であることは言うまでもありません。農村の民主化と経済的安定を担ってきた事実は重いものです。しかし戦後80年、真の民主化と経済的安定は実現されたのでしょうか。未だに稲作田を票田としかみていない政治家が、稲作を牛耳ってはいないのでしょうか。維新後160年、戦後80年、その間知らず知らず蝕まれてきた、日本人の基盤をもう一度再構築するには、今ある稲作の危機を奇貨とするしかないのです。

休耕田が雑草地から雑木林に戻る年数は、田んぼに開墾し水を引いてきた年数より圧倒的に短いに違いありません。田に水を供給する河川も雑草に覆われ、すぐに水が溢れます。雑草と実生の木が茂る中山間地の田園風景を見るにつけ、日本の国土と精神の荒廃を感じずにはられません。きっとまだ間に合うはずですが。